

プロジェクト名：超高齢世代の語りの社会学——「戦争の時代」の体験の記録化

代表者：福岡 安則（教養学部・教授 [2013年4月からは名誉教授]）

1 着想の経緯と研究の目的

① わたしのゼミに、自分の祖父が「傷痍軍人」だったという学生がいた。すでに祖父は他界してしまっていたが、おなじような体験をしたひとたちからの聞き取り調査をして、祖父の存在を自分なりに理解したいという問題意識を表明した。そこで、とりあえずは戦中派世代に会うことだと考え、ひとを介して、『末期戦中派の風来記』（本の泉社、2008年）の著作のある、詩人の土井大助氏を紹介してもらい、ゼミ生に聞き取りの手本を示すねらいもあって、わたしが聞き取りをしたことがある。2011年5月30日のことである。土井氏は、敗戦時に「士官学校」在籍の身であり、いわば“死に場所”を逸した思いを抱えて、シニズムのなかで戦後を生きてきたという。

② さらに、わたしは2003年以来、ハンセン病問題での当事者からの聞き取り調査を実施してきているが、いま、全国13園の国立ハンセン病療養所の入所者の平均年齢は83歳。ということは、日本の敗戦の1945年には、かれらの平均年齢は15歳だったということになる。80歳代後半、90歳代の、入所者の語りは、ハンセン病での受苦の体験と同時に、《あの戦争の時代》の体験をも紡ぎだす。彼ら／彼女らの「語りを記録化」するのに、いまがラストチャンスであるとの思いを、押さえることはできなかった。

③ ひよんなことから、2012年からわたしは「在日韓国大使館諮問委員会」委員を委嘱され、その委員会の席上で「在日コリアン弁護士協会」（LAZAK）の弁護士とも懇意になった。彼をとおして、サハリン残留韓国人など、あの時代の特異な体験をした在日コリアン／本国のコリアンにも接触できる可能性が高まった。

いわば、以上の①が種となり、②が地味豊かな土壌となり、③が肥やしとなって、この「超高齢世代の語りの社会学——『戦争の時代』の体験の記録化」のプロジェクトは着想された。まずは、ひたすら、1人でも多くの《あの時代の生き証人》のライフストーリーを聞き取ることが、本研究の目的である。

2 この1年間で、実際にどれだけの聞き取りができたか

この研究機構プロジェクト研究費として申請したのが70万円、実際に交付されたのは38万円。予算的制約もあって、直接、本プロジェクト研究費によって実施された聞き取りは、それほど多くはない。ここでは、プロジェクト研究費が下りる前の段階で近郊旅費によって実施した聞き取りや、ほかの調査旅行のおりに時間をやりくりして実施した聞き取りをも含めて、この1年間で実際に実施できた聞き取りについて、報告しておこう。

☆ 2012.7.10、サハリン残留韓国人による、正当な賃金の支払いを求める裁判を傍聴しに、東京地裁へ。原告の1人の「樺太帰還在日韓国人会」会長の李義八（イ・ヒバル）さん（89歳）をLAZAKの弁護士から紹介してもらい、その足で、足立区の団地の李ハラボジ宅へ行き、聞き取りを実施。2012.7.13、李義八氏宅を再訪し、補充聞き取りを実施。

☆ 2012.8.22、ハンセン病問題での韓国調査旅行のあいまに時間を作り、ソウル市郊外の安山（アンサン）の、サハリンからの帰国者たちが住む団地「故郷の家」を訪ね、「安山市故郷マウル永住帰国者老人会」顧問の金都榮（キム・トヨン）さん聞き取り。金ハラボジの語りで印象的だったのは、まず、日本統治下における樺太の時代には、彼は日本語で育ち、戦後サハリンに置き去りにされてからはみずからロシア語を学び、彼の父親が祖国韓国への帰国を夢見て、韓国人学校を設立するや、そこで韓国語を学んだとい

う。だから、聞き取り場面では、少なくともわれわれの日本語の質問は通訳不要であった。

☆ 2012.10.13, 福岡在住の LAZAK の弁護士が車を出してくれて、「無年金裁判」原告の、飯塚市在住の在日2世ハルモニ、金君子(キム・クンチャ)さん(86歳)の自宅を訪ね、聞き取りを実施した。

☆ 2012.10.15, ホテルにて、元・九州産業大学教授の林力先生(1924年生)とお会いし、聞き取り。林先生は、父親がハンセン病を発症し、鹿児島県の星塚敬愛園に入所。高校教師として同和教育運動を推進するなかで、『「癩者」の息子として』(明石書店, 1988年)を著わし、ハンセン病家族の立場にあることをカミングアウト。また、旧制の福岡商業学校卒業であり、かつ徴兵検査は乙種合格でありながら、東大・京大出の俊英のみが行く「経理部幹部候補生」の試験を受けるように命じられて合格。鹿児島県の兵団司令部にいるときに敗戦を迎えているが、敗戦直前の無謀な上官の命令で仲間が無駄死にする不条理を体験している。

☆ 2012.12.22, 国立ハンセン病療養所「栗生楽泉園」を訪ね、在園者の千島正一(園名)さん(1922年生, 90歳)から聞き取り。——じつは、2012.10.19の「国立療養所栗生楽泉園80周年記念式典」に招待され、入園者自治会長からの「感謝状」を頂戴したときに、園内を散策していてバッタリ出逢った千島さんが、「軍属」の経験があると言い、聞き取りに応じてもいいとの申し出を受けて、ハンセン病問題調査としては栗生楽泉園での聞き取りは完了しているにもかかわらず、あらためて再訪し聞き取りをさせてもらったものである。

このほか、2010年度～2012年度科研費基盤研究(B)「ハンセン病問題の《集合的な語り》の追求」(研究代表者:福岡安則)による聞き取り調査のなかでも、本研究プロジェクトのテーマに合致する聞き取り事例は多々あるが、それらについては、「科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書」(研究代表者:福岡安則, 課題番号:22330144)を参照していただきたい。

3 何がわかったか

《あの時代の生き証人》たちの語りには、戦争体験や植民地体験が大きな構成部分をなすことがしばしばである。たとえば、被爆体験、沖縄戦を生き延びた体験、満蒙開拓団の体験、兵士としてもしくは軍属として外地に赴いた体験、あるいは、朝鮮半島から強制連行されてきた体験、等々だ。ここに、ハンセン病の発症による、官民による強制隔離政策の被害者としての体験が重なることがある。あるいは、それらに被差別部落出身者としての不条理の体験が重なっていることがある。

このような無残ではあるが、貴重な体験を聞き取り、記録に残せるのも、はじめに述べたとおり、いまが、文字通り最後のチャンスなのだ。わたしは、何度か、日本学術振興会の「特別研究員」採択の審査委員をしたことがあるが、《あの時代の出来事》をトピックとして焦点化していながら、あまりにちまちまとしたテーマ設定をしている申請書を読むとき、正直、イライラした。なぜ、《生き残りの証人たち》からの聞き取りとその記録化に、まずは専念しないのか、と。業績は、あとから付いてこよう、と。わたしがこのプロジェクト研究で手がけた調査は、本来、一個人研究者がよくなしうるような、小さな課題ではない。いわば、国家的なプロジェクトとして、大掛かりなチームを編成して、人海戦術でやり抜かれてしかるべきものなのだ。——ともあれ、わたしが聞き取りをし、音声おこしをし、記録にまとめた「人生物語」は、誤解をおそれずに言えば、とにかく面白い。ひとりでも多くのひとに読んでもらいたいと願っている。そして、今回のプロジェクト研究での聞き取りは、まだ形になしえたものはないけれども、いずれの聞き取りも貴重なものであるので、可及的速やかに、カタチにし、文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』誌上などに、公表していきたい。